

◎ 展示会・イベント情報

1. 企画展「多治見の上絵付」開催

多治見市文化財保護センターで企画展「多治見の上絵付」が 2019 年 7 月 16 日(火)～12 月 27 日(金)まで開催されています。

明治時代、多治見(旧多治見町、以下同)は陶磁器の集散地として活気にあふれていました。町の中心地を東西に走る下街道沿いは 20 軒以上の陶器商が軒を連ね、仕事を求めて他地域から移り住んできた者も多く、にぎわいをみせていました。

陶器商が多くあったことで、多治見では上絵付業が盛んになっていきます。陶器商は本焼きした陶磁器を土岐や市之倉、滝呂などから買い付け、注文主の依頼やその時々々の流行に応じて上絵付業者に絵付けの注文をしました。

明治時代終わりから大正時代の初めには多治見の上絵付業者は 129 軒、画工は 370 人であったといわれます。その後上絵付は赤絵銅版や転写などの技術革新を経て多治見の特色となっていきます。本展覧会では多治見の活気あふれる時代とともに、江戸時代から現代までの多治見の上絵付の歴史を紹介します。



日時: 2019 年 7 月 16 日(火)～12 月 27 日(金)

会場: 多治見市文化財保護センター

〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘 10-6-26

TEL:0572-25-8633 FAX:0572-24-5033

(<https://www.city.tajimi.lg.jp/bunkazai/>)

開館時間: 午前 9 時～午後 5 時

休館日: 土・日・祝日

入場料: 入場無料

◎ 美術館情報

【各施設では、下記の特別展・企画展等のほか、常設展を開催しております。】

1. 岐阜県現代陶芸美術館【岐阜・多治見市】(http://www.cpm-gifu.jp/museum/02.exhibition/02_3.exhibition.html)

8月10日(土)～11月4日(月・祝)

企画展：華めく洋食器 大倉陶園 100年の歴史と文化

本展は、草創期から現在までの作品を通じ、その優れたデザインや品質を紹介するとともに、日本の洋食器文化における大倉陶園の役割を探るものです。また、最近の調査結果を反映し、これまで知られることのなかった創業当時など戦前の様子を伝える貴重な資料も併せてご紹介します。

2. 愛知県陶磁美術館【愛知・瀬戸市】(<http://www.pref.aichi.jp/touji/exhibition/>)

8月24日(土)～10月20日(日)

特別企画展：京都国立近代美術館所蔵 川勝コレクション 鍾溪窯 陶工・河井寛次郎 展

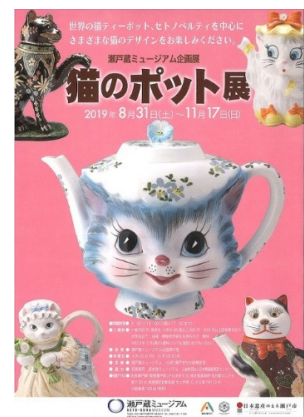
京都国立近代美術館は、質、量ともに最も充実した近代日本を代表する陶芸家・河井寛次郎作品のパブリック・コレクション(川勝コレクション)を所蔵しています。計 425 点にも上る川勝コレクションは、初期から最晩年にいたるまでの河井の代表的な作品を網羅しており、その仕事の全貌を物語る「年代作品字引」となっています。本展では、京都国立近代美術館所蔵・川勝コレクションの中から初期から晩年にいたる河井寛次郎作品と河井と交遊関係のあった濱田庄司、バーナード・リーチ、富本憲吉の作品を通じて河井の創作活動を振り返ります。

3. 瀬戸蔵ミュージアム【愛知・瀬戸市】(<http://www.city.seto.aichi.jp/docs/2011031500146/>)

8月31日(火)～11月17日(日)

企画展：猫のポット展

本展は、個人蔵のコレクションから、猫をモチーフにしたティーポット約 100 点を展示します。CHIKUSA、Fits&Floyd、Lefton、Otagiri など、かつて瀬戸で輸出向けに作られ、国内では見る事がなかったものがほとんどです。これらメイドインジャパンの品に加えて、イギリス、ロシア、スイス、オランダなど世界の猫ポットも登場。いずれも造形の面白さだけでなく、ちゃんとお茶を淹れるポットとしての機能も備えています。しなやかな曲線や愛らしさ、謎めいた妖しさなど猫ならではの魅力を巧みに生かした造形美、レトロモダンなセンス、多彩で豊かな猫ポットの世界を紹介します。



4. 出光美術館 門司【福岡・北九州市】(<http://s-idemitsu-mm.or.jp/exhibition/>)

8月2日(金)～9月29日(日)

企画展：宋磁—神秘のやきもの

中国・宋代の陶磁器は宋磁と呼ばれ、陶磁史上、美の頂点に達したとも評されています。龍泉窯、景德鎮、定窯などは、青磁・白磁などの単色の釉薬や、シンプルかつ研ぎ澄まされたフォルムが美しく、その造形感覚は神秘的な雰囲気を放ちます。一方で磁州窯、吉州窯など色彩に変化を凝らした絵付陶磁も生み出され、ユーモラスで生き活きとしたデザインを展開しています。また宋磁は日本では茶の湯のうつわとしても珍重されました。本展では、茶道具を含めた宋磁の世界を紹介します。